

運命の分かれ道で！

神奈川県 小沢昌子

満州から引き揚げて来て五十五年余りとなった今日、あの時代に幾多の困難な事に遭遇した私は、それらがすべて夢の中の出来事のようになってしまっ、今はもったいないような幸せいっぱいの日々を送っている。近年、新聞やTVなどの報道でなじみごとになってしまった、中国残留孤児や残留婦人のことを思うにつけて、私自身と重ね合わせてみると、何回かの運命の分かれ道に出会ったことをつくづく思い、ぞっとするような気持ちになってしまふことがある。

大連で生まれて十年、そして奉天（瀋陽）で高等女学校の専攻科を卒業して、望んでいた教員免許を取得して、新京（長春）の在満国民学校に奉職したが、その勤務も一年と一学期という短期間で、終戦により夢はあえなくついでてしまった。満鉄社員だった父の転

勤に伴って、満州国内をあちらこちらと転居して新京にやっと舞い戻り、これで少しは落ち着くのかと思っていた矢先に、ソ連軍の突然の不法侵攻、そして日本の無条件降伏により、昭和二十（一九四五）年八月新京を脱出した。今よく言われる日本による満州侵略などということは、当時は思うこともまったく無く、五色の満州国旗を五族協和のシンボルと信じきっていた時代であり、私もまったく疑念を抱くことは無く、国策教育に身を挺していた。

八月九日のソ連軍の侵攻により、家族は何とかして内地に帰らねばならないようになり、八月十一日に大至急に荷物をまとめて、鮮満国境を越えて朝鮮にまで南下することとなった。この当時、関東軍の家族はすでに引き揚げていたことを後になって知ったことだった。八月といえば、新京でも真夏の最中で、日中は暑い日差しが照りつけていたが、避難する者は来る冬に備えて毛布を持ち、オーバーなどを着込んでいて、汗だくだくの有様であった。母は、赤ん坊の妹を背負い、私と中学二年生だった弟は、大きなリュックサッ

クに当座の避難に必要な品物を詰め込めるだけ詰めて、更に両手にも荷物を下げて新京信和路の家を後にした。家の中に残している物は、あれもこれも思い出のある物ばかりで、どれひとつをとってもこのままここに置いて行くことには随分と抵抗のある物だが、この非常緊急の場合にそんなことを言っておれず、忍びないことだった。六月に死んだ妹の骨壺だけは、身の回りの物と一緒に抱いていくこととして、小学五年生の妹が胸の前に首から吊り下げた。一回は、新京駅から出る貨物列車に乗車して南下した。どこまで無事に行けるのかは皆目見当がつかない不安な旅立ちであつたが、そんなことを考えてもおれずに、ただ貨物列車に乗って南下するだけでも、安心感を有する気持ちだった。とにかく、貨物列車は大勢の新京脱出者を乗せて、安奉線を南へ、南へとひた走りに走って朝鮮に向かった。気持ちのうえからは不安だったが、それでも日本に向かつて一步一步近づいていると思うと、「暗夜の中の一灯」のごとく、はるか先には一縷いっしゆの望みがあるような気になつていた。何よりも、ソ連軍の

侵攻から遠ざかりつつあることが、一番の喜びであつた。頭の中では、なんとか一分でも早くこの緊迫した状態から逃れることだけが働いて、大事にしていた写真帳や、思い出の詰まつた大切な物などを置いてきてしまったことなどは、全然、念頭になかつた。それだけ気持ちが切迫していたのだろう。今になって、惜しいことをしたと残念でならない。大勢の人と荷物に押さえ付けられて、身動きもできない貨車の中で、ただ無事に釜山プサダまで行き着くことのみを願っていたので、どのくらいの時間がたつたのかは思い出せないが、数時間かかつて鮮満国境の街、安東の駅に着いた。

安東駅には、新京をたつ際に連絡をとっていた知人が出迎えに来ていて、ここに五家族ぐらいが住める家があるから一応そこに入って情勢を見極めてから、次の行動に移る方がよいのではないかという話で、そのとおりにすることとして下車した。幸いに、一緒に積み込んだ大事な荷物も無事に降ろすことができ、確保してあつた家に入った。三家族が三軒長屋のそれぞれに住み、他の二家族は近くの家に入って生活を始め

たが、結局、引き揚げるまでここで過ごすこととなったのである。

今後の生活について、落ち着いて考える間もないうちに、あの八月十五日終戦の日を迎えた。重大放送があるとの連絡を受けて、指定された場所に集合してラジオ放送を聞いた。天皇陛下からの直接のお話があるということは分かっていたが、それが連合国側の要求に屈しての無条件降伏のお話であるなどは、夢想だにもしなかった。放送は雑音が多くて、断片的にしからお言葉は聞こえなかった。日本が、戦争に負けたということをはっきりと認識したのは、重大放送が終わってしばらくたってからだ。玉碎しないで済んだことがよかったのかどうか？ これからどうなるのか？

日本に帰ることができるのだろうか？ など、いろいろな思いが浮かんできたが、そんな思いもすべてどうなるのかさっぱり分からなかった。まったく頭の中は空白状態となっていて、言葉を代えれば茫然自失で数日が過ぎていった。

それでも父は、満鉄社員としての責任から、残務整

理に当たらなければと決心して、私たちの引き止めるのを振り切って新京に戻って行った。残った家族は、母と中学二年、小学三年の二人の弟、小学五年と生まれてまだ一歳にもなっていない妹の二人、それに私の六人家族であった。父は出立に際して、新京ではお隣同士であり、満鉄ではかつて上司であったTさんに、私たちが家族のことを頼んで行ったので、私たちが家族はTさんを頼りに安東での生活を続けることとなった。

辛いなことに終戦後になっても、ここ安東では中国人による暴動もなく、まだソ連兵も進駐していなかった。表面は平静を保っていた。ただ、朝鮮人がいつ準備していたのか知らないが、日の丸を巴まんじに塗りつぶし、四隅に易者の広告のような模様の描かれた旗を翻しながら「日本負けた。朝鮮独立。万歳（マンセイ）」と、大声を出しながら街中を練り歩き、大騒ぎをしていたのが目立っていた。私たち日本人は、今後の生活がどうなるのかまったく先行き不明ということは覚悟していたが、それでも不安は一日一日と増すばかりであった。そのうちに、在留日本人の横の繋がり

りを強化するために、日本人会の組織ができてきて、不安の中においても、一応生活を続けて行くことができるようになった。

何日かがたったところに、ついに安東にもソ連兵が入ってきた。ソ連兵については、態度行動が粗暴のうえ無いという前評判が、どこからともなく伝わってきていたので、在住の女性はそれに対応するように、いろいろと準備をした。若い女の人は頭を断髪にしたり、丸坊主にしたりして、顔には鍋墨を塗ってどす汚くし、男ものの服を着ることにした。いつでも隠れることができるように、押し入れの中から天井裏に逃げられるように準備をして、練習もしていた。野獣のごときソ連兵の行爲については、日がたつにつれてあっちこっちでの野蛮な話が伝わってきて、恐怖心を沸き立てた。私も、自分の身は自分で守るしかないと随分と苦心をさせられたが、そんなことでびくびくしながらの毎日を送っていたが、それは大変だった。

ある日、日本人会から「元接客婦であった人は申し出てもらいたい。一般婦女子の防波堤になつて欲し

い」というような内容の連絡が回覧されてきた。本当にひどいことをお願いするものだと思つて読んだが、それに反論するだけの対策を持つてゐるわけではなく、申し出る人は勇気のある人だと尊敬の念を持つと共に、気の毒だなあと憐憫れんげんの気持ちがあ交差するだけだった。そんなことがあつたからかどうかは知らないが、少なくとも安東では、ソ連兵による暴行・凌辱の事件があつたとの話は、私は聞かなかつた。

現金を所持していても危険なので、手持ちの紙幣は瓶に詰めて床下に隠して、当座必要な金額だけを手元に置いて生活費としていたが、家族が働いていないとお金を隠していると見られ、ソ連兵や、現住民から狙われる心配があつたので、弟二人は豆腐や油揚げを入れたバケツをてんびん棒で担いで、売りに歩いていた。

安東での避難生活も、苦しいうちにもどうにか慣れてきて、季節も夏から秋へ、秋から冬へとどんどん移り変わっていったが、弟たちは霜焼けではれあがつた手から血がふき出しながらも、豆腐・油揚げ売りを続

けていた。家族が生きていくためと覚悟を置いていて、いとこか、つらいとかの泣き言を言うこともなく働いていた。あのころの二人の弟の働きを思い出すと、今でも胸が熱くなる。食えることは、お米は高くてなかなか買えないので、野菜や、小豆や、雑穀を混ぜた炊き込みご飯か、雑炊だったが、それでも当地はまだ平穩な生活だったので、毎日、ひもじい思いをせずに食べていた。敗戦国民として、外地での食生活にしては恵まれていた方だと思ひ感謝したものだ。

ソ連兵からの迫害は、婦女子だけでなく男性の方も深刻なものとなってきた。働けそうな男性はソ連兵に拉致されて、シベリア送りになると言われていた。シベリア開発に従事させる日本軍の捕虜だけでは不足するというので、兵隊だけでなく一般の居留邦人の男性も捕らえられていた。いわゆる後に話に出る男狩りといわれるもので、安東でもそのうわさで戦々恐々であった。男性が、用事があつてどうしても外出しなければならぬときには、赤ん坊をねんねこぼんで背負って外に出るといふ奇妙な姿であつた。安東で拉

致された男性で、すぐに安東に戻された人はいなかったとのことで、全員シベリア送りになつたらしい。

昭和二十年も暮れて、新しい年を迎えたが、早々に中共軍が進駐してきて、治安維持に任じた。安東も中共の統治下になつた。日本に帰れる見通しは全然たなかつた。

三月になると、日本人の女性が中共軍に徴用されることとなつた。丁さんの家の華子さんは、旧満鉄病院で、当時は中共軍の陸軍病院となつていたところに徴用された。華子さんは、奉天女子高等学校専攻科を卒業するときに、看護教育終了証をもらつていたので、中共軍陸軍病院でも看護婦として勤務することになつた。入院患者は、全員中共軍の兵士だったが、軍医以外の病院勤務者は医師、看護婦をはじめ、ほとんどが徴用された日本人だった。それまで私は運よく徴用されずにいたが、三月の末になつてついに徴用通知を受け取つた。終戦以前に、赤紙といわれた召集令状が男性にきたときの気持ちもこうであつたらうと思つたが、「ついに来るべきものがきた」という気持ち

ちになり、反面、ほっとした感じだった。

私は教員の免許を持っていたが、できれば華子さんと同じに陸軍病院で勤務したいと思い、軽い気持ちで集合場所に向かった。そこには二十人ほどの女性が集まっていた。日本人会の世話人の方に点呼をとられた後に、中共軍の兵士に引き渡された。すぐにトラックが来て、それに乗るように指示された。一緒にトラックに乗せられた人たちと話をすることも許されず、何となく異様な雰囲気であった。これからどうなるのか説明もないままに、トラックは走り出した。不安と緊張の相乗で、言葉も出ない状況だった。トラックは、安東市街を抜けて郊外の田舎道を走って行った。「ごごとと、ごごと」と悪路を揺られながらしばらく走り、どこだか分からない部落に着いて降ろされた。以前、何に使われていたのか分からない、がらんどうのコンクリート造りの建物の中に入れられた。そこで、同行の日本人から「皆さんはここで働いてもらうこととなったので、着る物や日用品などで必要な物があつたら、届けて欲しいという手紙を、自宅宛に書くよう

に」と言い渡された。だれも声を出すこともしなかった。驚きと不安が一度に襲ってきて、頭の中を駆け巡っていた。私は、華子さんと同じように家から通えるところならば、四囲の状況から致し方ないと思っただけだが、家族と離れてこんな見も知らない所で働かされるなんて、思いもよらないことで、「家から通えるところで、働くようにしてほしい」と、泣きながら頼み込んだが、全然取り合ってもらえなかった。ほかの人たちは皆あきらめてしまったのか、手紙を書き始めたが、私は書く気にならず、何もせずただぼんやりとしていた。そして、もう一度「父がいなくて、私が一家の中心である」という、家庭事情を泣きながら話して、家に戻してもらうことを頼み込んだが、返事はもらえなかった。皆も、話し声一つ立てずにしんみりとしていて、不気味な感じがしばらく続いていた。

しばらくすると、米俵を山のように積み武装した中共兵が数人乗ったトラックが来て、それに乗るようになされた。私の願いが聞き届けられたとは思えなかった。余計に不安がつづってきたが、どうしようも

なかった。ここまで追い詰められたからには、どうにでもなれと開き直った気持ちになつて覚悟を決めて、トラックの荷台に座った。残った人々がどのようになっているか、考える余裕などなかった。どこに連れて行かれるのか不安はつのるばかりで、後悔の気持ちでいっぱいだったが、なるようにしかならぬとあきらめてしまうと、気持ちのうえにも少しはゆとりが出てきて、トラックの荷台から周囲を見渡すと、同乗の兵士はそのままの姿で無言だった。行きかう現地人の視線を浴びながら、市街地に入った。そこがどこの市街地なのかは、まったく見当がつかないが、割り合いに大きな町並みのあるところであった。間もなくトラックは止まって、私は降ろされたが、降りたのとたんに、そこは旧満鉄の病院だったことが分かった。まさしく、泣きながら訴えたところに連れて来られたのであった。兵士は荷物を降ろしてから、私を病院の総婦長の部屋に連れて行った。私は「ああ！これで助かったらしい」と思い、ひとまず安心して心の中で叫び声をあげた。この部屋で、氏名、年齢、今ま

での経歴などを質問された。私は、教員だったことや、学生時代に医大の先生から看護法を習い、救急法については、日本の軍隊からひと通りの訓練を受けたことなどを話した。華子さんが看護婦として立派に勤めていることもあったし、又、現在看護婦が不足していることもあって、総婦長の一存で看護婦として勤務することになった。危なっかしい看護婦だったが、五病棟に配属された。看護婦は、医師の指示により言われたとおりに仕事をすればよいので、白衣を着れば皆立派な一人前の看護婦に見えて、患者にも安心感を与えた。私自身も、身も心も引き締めて一生懸命に働く決心を固めた。

病棟婦長、同僚看護婦、S 医師親子などに助けられて働き、日ごとに看護婦としての技術も覚えて、静脈注射も上手に打てるようになった。しかし、まだまだ自分の力不足は感じており、相手は中国人の患者なので、言葉の障害もあって大変な面も多かったが、大した失敗もなく、周囲からも信頼されていた。包帯巻きは、学生時代の訓練のおかげでいつも褒められてい

た。しかし、そこまで行きつくには随分と努力をしたし、言うに言われぬ苦しみもあった。特に、当直夜勤のときの精神的な不安は、言葉では言い表せないものだった。今になって考えると、やはり若かったからできたことだと思う。戦地から送られてくる兵士の傷口は蛆だらけで、包帯の間には虱がすき間なく並んでいた。異様なにおいのする軍服も、虱だらけだった。戦いの傷は様々で、まともに見られたものではなかった。回診中に気分が悪くなって我慢がでせずに、回診用具をその場に置いたままトイレに駆け込んだことも、幾度となくあった。しかし、そんな場面にも段々と慣れてきて、そのうちに壊疽えきそで大腿部から切断された傷口、銃弾の摘出手術などの多量の出血や、傷口の生々しい患部の手当などをして、平気になっていた。どうやら一人前の看護婦に成長したらしい。

食事は中国風で、主食のボーミーパンや粟がゆ、そしてチェンピンなどで、それに副食がついていた。患者は米飯だったので、病棟付きの看護婦が、「看護婦さんも、たまにはお米のご飯が食べたいだろう」と

言って、患者食の上前をはねて、戸棚の中にそっと入れておいてくれた。人間同士の触れ合いを感じられるようだった。彼らからは、ときには「同士」と呼ばれ、会合の際には中国共産党歌を歌わされたり、メーデーの行進に参加させられたりしたが、その反面外出した兵士が真桑瓜マクワウリをおみやげに買ってきてくれたりもした。私たち徴用者も、外出時には軍の名札を付けているので、どんなところでも大きな顔をして歩けたし、通勤も最短距離を通っていた。

こんな環境の中で一番の悩みは、虱だった。一度、病棟を回って来ると、着ている白衣から下着までに、びっしりと虱がたかかってしまうので、虱退治が日課の一つになっていた。病院勤務中、給与らしいものは何ももらわなかったが、家族はTさんの精神的な支えを受けて、手持ちのお金が通用していたので、どうにか暮らすことができた。しかし父からの音信は不通で、生死のほども分からなかった。混乱している世の中にあっては、お互いにただただ、無事であることを祈るしかなかった。

そんなときに、引揚げ帰国のうわさが流れ始めたが、そのうちに病院でも希望調査が行われた。昭和二十一年の夏のころだった。私たち家族も帰国に対する希望がもてた。

しばらくたってから、病院で帰国許可の発表があった。仲間は次々に名前を呼ばれて喜び合っていたが、私はまだ呼ばれなかった。そのうちに華子さんも呼ばれた。私が呼ばれるのを一緒になって待っていてくれたが、いつまで待っても呼ばれなかった。この次か、この次かと気もめたが、とうとう呼ばれなかった。私は、帰国許可者の名簿から外されていたようだった。呼ばれた人、呼ばれなかった人で、しばらくはざわついていた。又ここで、私は運命の分かれ道に出会ってしまった。一瞬、どうしてよいか分からなくなって、気持ちが悪く落ち込んでしまった。そのうちに、このままではどうしようもないと気を取り直して立ち上がり、帰国許可が降りない理由を聞いたが、はっきりと納得する返事はもらえなかった。

再び我が家の家族の状況を話して、是非帰国できる

ようにとお願ひした。その場にいた副院長は、中国人の女医で日本の医専を出た方なので、話はよく分かってもらえたように思ったが、ただにこにこ笑つてうなづくだけだった。今までは何となく運の付きがよかったが、今度はもう駄目かと半分あきらめてしまおうと悲しくなつてきて、涙があふれ落ちてきた。これ以上は致し方なく、持ち場に戻つた。持ち場に戻つても仕事が出来なかつた。考へても考へても、納得がゆかずに悲しくなるばかりであった。しばらくすると、婦長さんと呼ばれて、副院長室に行くようにと言われた。何事かといぶかしく思いながら一人で副院長室に入った。何と、そこで帰国の許可をもらった。そのときの副院長の姿が、神様か、仏様のように見えた。私は、日本流でできる限りの感謝の気持ちを表し、喜びを伝えた。

私は、この小病院でのことは、戦後の苦しくつらい幾多の体験の中でも、最も重要な部分を占めるものと思つている。私よりも、もっともつと大変な運命に遭遇した人々が多いが、戦争の悲惨さを一般の兵士たち

の傷口から直接に体験したような人は、そんなに多くはないと思う。それだけに余計に、戦争による惨たらしさを思い知るのである。そして又一面では、戦中に受けた軍事訓練が、かつての敵国の兵士を救うために役立ったという矛盾、これも私にとつては深く考えさせられたことであつた。自分が信じていた国家には裏切られたが、様々な人たちを通じて得た、愛の心。幾度か不幸な目に遭いながらも切り開かれた運命。過ぎ去つて見れば、たったの五カ月だったが考え方によれば、ものすごく長いものでもあつた。しかし、こうしたことは苦しくて切ないことだったが、決して無駄ではなかつたと思つている。過ぎ去つた遠い昔になつたことだから言えるのかも知れないが。

病院から解放されてしばらくたち、日常の生活にも大分落ち着きを取り戻し、帰国の日の一日も早いことを願ひながら、毎日を過ごしていたが、安東の在留邦人の帰国はいつになるのか皆目見当もつかなかつた。病院ではやっていたこつくりさんで占つては、半ば信じ、半ば無駄と思ひながらも期待する心境だつた。

そんな時、正規のルートでの引揚げではなくても、お金さえ出せば安東から船で鴨緑江オウリャクコウを渡つて朝鮮に行き、そこから日本に帰国することができるといふことを知つた。父が、かつて満鉄から永年勤続の記念にもらつた「金杯」が、まだ手元に残つていたので、これを処分してお金をつくり、船で安東脱出を決行することにした。父が、長年にわたつて心血を注いで頂いた、貴重な品物ではあるが、どうせ持つて帰国することはできない物であるから、家族のために使わせてもらふということ家族一同の合意を得て、お金に代えた。今度は、船旅なので持つていける物も大幅に制限されて、ここまで苦勞して持つてきた生活必需品もほとんど残すことにして、本当に必要な最小限の衣類と、飲料水、食糧を大きなリュックサックに詰めて、私と弟がそれぞれ背負い、小学生の弟と妹は自分だけの包みを持つた。母は、赤ん坊を背負い、両手におしめなどの必需品を持つて、世話になつた家を出た。このままこれから先の逃避行が無事に進めば、約十一年余にわたる満州での生活が終わることになるのだつた。

船は、「ジャンク」のような漁船で、船倉が客室代わりになっていた。三家族が一緒に乗り込み、すぐに朝鮮に向かって出航した。同じように引揚者に雇われた船が、何艘かあった。これで帰国の夢が叶うのかどうかと思ひ、複雑な心境になって船倉で横になった。考えてみれば、満州生まれの満州育ちである私には、帰国という言葉に対して実感がわかなかった。

運を天に任せるしかない旅立ちであった。夜になって、船は帆を上げて鴨緑江の河口から海に出て南下した。正規のルートではないので、夜間の航海であった。海面に映る月の光は、金波、銀波と輝き平安そのものであった。今日までの苦勞を、すべて忘れさせるような美しさであった。天地自然には、あの戦争の悲惨なことも、むごたらしいことも、何も通じてはいないようだった。

二晩目に朝鮮に着いたが、どこだったかは分からないが、今思うと最近日本に密入国する難民と同じようなものだった。暗くなつてから、月の明かりを頼りに上陸し、一同黙々として南を目指してひたすら歩き出

した。夜が明けると、家族はそれぞれ肩を寄せ合つて野宿した。あの『流れる星は生きている』の本の内容とまったく同じで、後年になってあの本を読むと、当時を思い出して涙が止まらなかつた。

あの恐ろしい三八度線だろうか、鉄条網をはさんで草原が広がっていて、その両側に武装した兵士が立っていた。どうなるだろうかと恐怖で足がすくんでしまったが、とがめられることもなく、そこを通り過ぎることができた。それからどのように行動したのか、記憶に残っていない。多分、恐怖心で頭の中がからっぽになつていたのだろう。いろいろな苦勞があつたことは間違いないのだが、やつと米軍の管理下にある收容所にたどり着いて、食べ物を渡されて、ほつと安堵したことは覚えてゐる。

この收容所で一週間ほど過ごした。朝鮮人が売りに来たダイコンを、金網越しに一本十銭で買つて、家族でかじつたこともあつたが、そのみずみずしさと甘味は、今でも忘れられずに、時々思い出してかじつては、当時をしのいでゐる。検疫、消毒も終えて、この

収容所を出発し列車で釜山に送られた。昭和十八年の修学旅行を思い出したが、月とすっぽんのような違いであった。

釜山では、釜山港埠頭の倉庫に収容されて、引揚船の入港を待った。警備の保安隊員が「今、日本ではやっているよ！」と言って、「リンゴの歌」を歌ってくれた。もう日本に帰り着いたような、平和な気分になつていた。目の前の海は、かつて救命胴衣を着けて連絡船に乗り、日本内地と往復したことのある海だが、今はそんな物など無く、危険を承知で引揚船に乗ることを、一日も早くと待っている境遇であつた。船が、沖の方からこちらに向かつて来たが、近づくとつれて日の丸がはっきりと見えた。「船がきたぞー！」とだれかが叫ぶと、一斉に岸壁に眼が注がれた。今度こそ日本に帰れると思うと、胸がいっぱいになった。「日の丸」と「故国」への思いとを、これほど強く感じたことはなかつた。

引揚船は、「天佑丸」という病院船だつた。天の佑（助け）という名前はよかつたが、後に大きな災難が

待っていると夢にも思わずに、喜び勇んで乗り込んだ。かつては救命胴衣を着けて渡つた荒れる海峡を、今度は二段に区切つた床の上下それぞれに、一人ずつ座れるだけのスペースを与えられて、ぎゅうぎゅう詰めにされた。船が海峡に差しかかると、しけで大荒れとなり、皆は洗面器代わりの空缶に「ゲー、ゲー」と吐き始めた。それまではまだよいが、そのうちに胃の中に何も無くなり、ついには胃液と共に、腹の中に入った蛔虫まで吐き出す苦しみとなつた。大勢の人たちの吐瀉物の悪臭に我慢がならず、甲板に飛び出したが、甲板では揺れが激しく海中に投げ出されそうな状態だつた。台風に遭遇したのだつた。

夜になって杵岐の島の沖合に仮泊した。しけも大分収まつたので、朝になって出航したものの、今度は座礁するという事故が起きた。船体が傾きはじめてたので、救命ボートで退避することになり、再び生命の危機にさらされた。荷物は全部置いたままで、休ひとつでボートに乗り移り、近くの島に向かつた。上陸するために、海中を歩くしか方法がなかつたが、その島

の住民がボートのところまで来て、一人ずつ背負って島に上げてくれた。ここで温かいふかし芋をいただし、迎えの船便を待った。目の前の天佑丸は大分傾いていた。突発的な災難で気が動転していたので、島の名を知ることもしなかった。今では幻の島となっているが、お世話になったことは死んでも忘れない。

迎えの船は、米軍の上陸用舟艇で、「がっ、がっ、がっ、がっ」とすさまじい音を立てながら、砂浜まで押し上がってきて私たちを乗せて、再び大きな音を立てて海に浮かんだ。船内では、斜面になった床のところまでぎっしりと座り、芋ヅルとふすま団子の入ったすいとんが出されて、一息ついた。やっこのことで博多港内に着き、無事に日本の土を踏むことができた。幸にも天佑丸に置いたまま避難した荷物も、無事にそれぞれの持ち主に戻り、一人当たり千円の新円を受けて、引揚げ先別に向かう列車に乗り、両親の故郷にたどり着いた。博多で再会したTさんたちから、「船が沈没して、全員だめだと聞いていたので、心配していた」と喜ばれた。父が一緒でなかったので、ひ

とまず母の実家に落ち着いた。昭和二十一年十一月十三日だった。一時しのぎのつもりであったが、父が帰って来るまでここでお世話になってしまった。叔父の一家が温かく迎え入れてくれて、私どもの弟妹の就学、私の就職などの手続きにも、小田原まで出向いて済ませてくれた。私は、村立の小学校に十一月三十日付で就職することになり、弟も県立小田原中学校に編入することができた。

引き揚げて来るまでの苦勞を、まるでうそのように感じる日々となった。ただ、当時の満州国の国民学校初等科訓導の免許状が、正式な資格として認められなかったので、受けた辞令では助教だった。しかし、新年度からは任用替で、訓導として認められた。終戦後の食糧難の時代に、農家だった親せきの人たちの親切に甘えて、居候的生活を八カ月も続けて、父の帰って来るのを待っていた。叔母は神様のような人で、一人前の手伝いもできない母や私に、「手伝ってもらって助かったよ!」と言ってくれたり、「娘らしくしていいないとね!」と言って、洋服などに気を遣ってくれた

りして、引揚者としてはもったいないくらいの生活をさせてもらった。

父が無事に帰って来て、父の実家の物置を改造して、それなりの生活ができるようになった矢先に、母は病いに倒れてしまった。父は村の農協に職を得て、わずかながら収入もあるようになったが、それでも生活は苦しかった。そのような中で、母は四十九歳の若さで死亡した。これから少しでも楽をしてというときだった。人生の最後は「苦患の苦死」とも言えるものだった。かつては、みんなから「満州の姉さんは、幸せでうらやましい」と言われていた母だったが、すべては戦争が運命を変えてしまったのだ。でも、母は肉親たちの温かい愛に包まれて、感謝しながら旅立ったことと、私は信じている。楽な暮らしではなかったが、理解ある叔父、叔母の勧めで、「身につく財産」とのことと、弟たちは苦学をしながらも、それぞれ大学まで進み、現在は安定した生活を幸せに過ごしている。

私は、幾度かの運命の分かれ道乗り越えて帰国し

て以来、関わりがあった多くの方々に助けられて、現在に至っている。そして、微力ながら地域社会の福祉のお役にも立つことができ、毎日の幸せに感謝して過ごしている。

半世紀を振り返って

神奈川県 織田 郁夫

昭和二十（一九四五）年八月十五日、私は中国東北、いわゆる満州国四平市の満鉄社宅の一室にいた。道路一つ隔てた向こう側には、重大犯罪を犯した中国人だけが収容されている監獄がある。足に鎖をはめられたまま作業をしている囚人たちの姿が、鉄格子の扉の隙間からちらりちらりと見えるし、監獄の周りには朝鮮人や中国人の部落が入り交じって所在していた。私は、そんな環境の中にある平屋建ての満鉄社宅で、雑音がひどくて何を言っているのかよく聞き取れないながら、重大放送を聞いていた。放送されていた